【論　文】

読本における尼子史伝

田中則雄
（島根大学法文学部）

摘　要

『陰徳太平記』等の軍記に記される尼子氏の史伝は、近世後期に至って読本の素材として取り上げられた。そこでは読本独自の様式に従った作品化がなされている。

キーワード：読本、近世小説

はじめに

尼子義久は永禄九年（一五六六）、毛利元就に降伏して富田城を退去、この後山中鹿介らの遺臣が尼子勝久を擁して各地で戦いを続けるが、終に出雲の地を奪回することは叶わなかった。その後徳川泰平の世に至っても、『陰徳太平記』（正徳二年（一七一二）刊）等の軍記によって知られる尼子氏の興衰に関心を寄せる人は多かったと思われ、近世後期小説においても度々取り上げられている。これらの中で特に読本作者たちが尼子史伝から何を読み取ったのか、そしてそれを読本というジャンル独自の様式にどのように組み入れたのかという問題について考察を試みたい。

軍記では、事件ごとに章段を設けこれを重ねていくという方法をとる。各章段に描かれる事柄は、時に分岐合流しながらも直線的に連なっていくことで一つの時代の様相を描き出す。結果全体が長大な分量に及んだとしても、そこに構造性は見出し難い。一方近世後期の読本においては、基本的に、長編小説として作品全体を統括する枠組が考慮されている。単なる話の積み重ねではなく、それらを相互に関連付けながら作品全体に構造性を与えるための仕組みが存する。曲亭馬琴の読本はかかる構造性が最も顕著に認められるものと考えるが、他の作者による読本においても、馬琴に類似した方法、あるいはそれとは異なる方法に拠りながら、何らかの構造性を作り出そうとしている。特にこのような観点から読本の様式について探究しようとするとき、軍記由来の話が読本においていかに組み上げられていったかを跡づけることは有益であるように思われる。

一　『絵本更科草紙』

『絵本更科草紙』は栗杖亭鬼卵作、前編・後編・三編各五巻から成る。前編は文化八年（一八一一）、後編は同九年、三編は文政四年（一八二一）刊。版元は前・後編が勝尾屋六兵衛、三編が河内屋嘉助、大坂出来の読本である。山中鹿之助[1]の父を、信濃国村上義清に仕える相木森之助、母を同じ村上家の老臣楽岩寺右馬之助の娘更科であるとして、この父母の伝から説き起こし、鹿之助の生い立ち、後に尼子家に仕えてその再興に尽力することを描く。また鹿之助をはじめ尼子十勇士が次第に集結するという形の〝家臣捃拾譚〟でもある[2]。鹿之助の出身を出雲から遠く離れた信濃とするのは、本作の大きな特徴である。

かつて拙稿において本作を取り上げ、人為を超越する理法の作用などを置くことなく（例えば尼子家に関与する因果などのことは書かれず）、人物たちの心情や行動の連鎖によって筋が進行するように作られていることを指摘したが[3]、本稿では改めて、これらの筋の進行全体を統括する枠組が、緩やかながら用意されていることを論じたい[4]。

作者は作中全体にわたって「天下」という観点を提示する。まず巻頭、戦国の世の乱れということから説き始める。

爰に人皇百六代後奈良天皇の御宇天下大にみだれ、足利将軍義晴公京都に在せども、国々蜂のごとくに起り、西国には島津、大友、菊池、竜蔵寺、東国には今川、北条、北国には武田、上杉、村上、諏訪の輩たがひに蝸牛の角の争ひ止事なく、英雄星のごとくにあらはれ、天地始りてよりの大乱、糸を乱せしさまにて、いつ治世となるべくもあらざりける。

信州村上家も、隣国との間に不穏の要素を抱えていた。相木森之助の叔父相木市良兵衛は村上家重臣の一人であったが、「いさゝか主をうらむる事ありて」密かに国を立ち退き、甲州の武田晴信（信玄）に降った。村上家では武田家に不快を募らせたが、抗し得ず無念の月日を送っていた。

村上の老臣楽岩寺家の娘更科が森之助に懸想し、武芸の師井上光興を媒に頼み結婚を遂げる。老臣牧島玄蕃の弟の大九郎なる悪漢が更科に横恋慕し、森之助を辱めるが、森之助はこれに全く抵抗しない。見かねた更科が武具を取って報復に出ようとすると、固くこれを止める。また別の日には路上で喧嘩を見たと言って震えながら帰宅する。更科は夫は全くの臆病人と見て思い悩み、彼に勇を授け給へと氏神に日参して祈り、その場を大九郎らの悪漢に狙われるが、彼女は武勇を顕してこれを撃退する。森之助はこれに驚き、彼女を実家の楽岩寺家に謹慎させるが、大九郎らによって誘い出され生け捕りにされてしまう。この時森之助が駆け付けて力業を発揮し、賊を切って彼女を救った。――楽岩寺右馬之助がこの騒動の責任は娘の更科にあると彼女を手討ちにしようとするのを、森之助は抑えて言う、「かゝる事の出来たるも天命也。且は我誤りなり。いかんといふに、……我事を慎むにすぎたるゆへ、婦人の心より億病者とおもひ、神に祈りて勇気を増んとする、憎むべきにあらず」。彼は努めて争いを避け慎んでいたのである。

大九郎と一緒に切られた賊の中に、武田家の佞臣長阪左衛門尉の弟と跡部大炊の甥がいた。このことから長阪・跡部が主君武田晴信に強引に働きかけ、武田家から村上家へ森之助の身柄引き渡しの要求がな

される。村上義清はこれに反発するが、森之助は自分が行くことで両家の衝突は避けられる主張し、あえて甲州へと送られる。武田家の二人の佞臣は森之助を切ることを主張するが、忠臣馬場美濃守によって密かに庇護されて軍師となり、やがて更科と再会を果たし、幼い我が子鹿之助とも対面する。しかしその間に村上家は衰え、義清は越後の上杉家に身を寄せたことから、森之助は主君のいる上杉家と戦いたくないとして退隠を申し出る。馬場は森之助に、上杉と直接当たることを避けて遠州の諏訪が原城に入り、幸い森之助は自分と容貌が酷似することから、自分の影武者としてこの地を治めることで、北条・今川の抑えをなすようにと説得する。かくて森之助は、戦わずして敵を防ぎ、徳によって人民を統治する。

後に鹿之助が父母のもとから自立しようとする時、更科は鹿之助に、「父御は近頃仏の道に深く入らせ玉ひ、人はおろか生あるものを害する事をきらひ給ふ」と言う。前編全五巻は、以上のような鹿之助自立以前の森之助・更科夫婦をめぐる話であり、その全体を括るのは、森之助の〝非戦の思想〟であると解される。

残る後編・三編各五巻は鹿之助を主人公とする。森之助が諏訪が原城から退去し隠棲することを決めた時、鹿之助は身の振り方を尋ねられて次のように答えたとする。

鹿之助は最前より一言のいらへもせずしてさしうつぶいてありけるが、ふとやかなる息を継て父の前にさし寄、「……某つら〳〵考ふるに、今天下大に乱れ、英雄星のごとくに起り、いつ昇平の代となりなんも計りがたし。いやしくも我幼年より井上道人（かつて父母の武芸の師でもあった前出の井上光興）にしたがひ、軍学の奥義を学び剣術の琢磨せしも、天下に英名を顕はさん為なり。……某は天下に横行して世を納め民のくるしみを救はん事を願ふ外なし。我一人此城に留り、寄来らん敵に淡吹せ、其上何国へも立退、名将をゑらんで随身せんより外の願ひは是なし」と弁舌水の流るゝごとく左も勇ましく述ける。

ここに再び「天下」という観点が提示される。鹿之助が名将に仕えて我が英名を顕したいと言い、戦う意思を表明するのは父と対照的ではある。しかしその彼方に昇平の世の実現、人民の救済ということを見据えている。

この後鹿之助は都へ出るが、次第に都人の風俗に染まる中で、中御門中納言宗教の息女九重姫に懸想する。この恋愛をめぐる一連の描写が、鹿之助を武勇忠義一徹の完全無欠の人とはせず、自然の恋情を描くものとなっていることは前掲旧稿に指摘した。曲折あって鹿之助は九重姫と結ばれ、彼女の姉八重姫が尼子義久の妻室となっていたことから、尼子家に仕えることになる。このことについて、「山中鹿之助は中御門中納言宗教卿のたのみによつて不計も尼子義久にしたがひ、自臣下となりて生涯忠臣を旨とし千辛万苦の中に志を翻さず、寔に天下の豪勇と後世筆に伝るも、一言の義によれるゆへなり」とする。尼子との間には宿縁のごとき縛りは存在せず、彼は中御門宗教の依頼を機に、己の志を実現するための場を尼子に定めたのである。

尼子家に赴いた鹿之助はまず一つの功を立てようと図る。伯耆国の山名氏資の家臣菊池乙八は大強剛力の者で、近国を破壊しては攻め取っていた。鹿之助はまず乙八と決闘してこれを滅ぼす。山名は力を落とし、近国からの反撃を恐れ、「所詮手強き大名と和睦し諸方の敵を防んより外なしと評義一決しけれど、是まで乙八強勇にまかせ理不尽の振廻のみせし事なれば、此方より和睦せんといふとも承知せまじ

と、各眉をひそめ」困惑した。鹿之助はこのことを聞き出し、単身乗り込んで山名氏資を捕らえる。

其時鹿之助大音上、「某を誰とか思ふ。尼子義久が忠臣山中鹿之助幸盛といふものなり。山名近来無法の軍をなし人民を悩す。依て某爰に来つて氏資を伴ひ、主人義久の前にて和睦をなさしめ、民の危難を救んために向ふたり。汝等我に手向ひなさば、主人を一突なるぞ。氏資前非を改民を撫育するに於ては、程なく此城へ帰すべし。主人を大切に思ふ者あらば、我に随ひ来るべし。命に気づかふ事なかれ」と、数万人の中を小児を引提たる如く悠々と立帰るに、……

かくて尼子義久は、氏資に対して礼を尽くしてこれを心服させる。

（義久）早速山名に対面ありて賓客の礼をなし饗応給へば、山名も義久の徳になつき、且鹿之助が智勇敵対なり難きを察し、長く唇歯の交りをなさんと誓詞を取かはしければ、義久大に悦、家来あまたに守護させ伯耆国へ送りつかはしける。山名が家来どもは安き心もなく案じ暮しけるに、氏資無事に帰国し、且尼子が厚情を述、向後無二の中とならんと心服しければ、家中の悦、「寔によき後楯こそ候へ。此上は枕をやすんじ玉へ」と、一家中鼓腹してよろこびける。

戦国の世実際には、自国の領地と覇権を拡大するため時に手段を選ばず相手を滅亡にまで追い込むということが行われていたが、これはそれとは異なる。相手の追い詰められた心理状態を察知した上で救済を掲げ、徳化するのである。鹿之助の武勇はその先に世の安寧を見据えていた。

史実においては、尼子義久が毛利に降伏し囚われの身となって藝州長田へ移されて後、遺臣たちが勝久を擁立して富田城の奪回を目指して各地で転戦し、やがて信長・秀吉に接近して播州上月城に入って毛利と戦うも、敗れて勝久は自害して尼子氏は滅ぶ。本作ではこれを、義久は毛利に圧されて播州上月に蟄していたが、鹿之助を得てから挽回し、雲州富田の旧城を回復して、妻室八重姫、継嗣勝丸（後の勝久）と共に移り、鹿之助は上月城代となったと改変する。尼子氏は凋落滅亡の途にあったとはしないのである。

爰に雲伯隠因石作藝三備播十一州の大守、雲州富田に居城ある尼子晴久は、永禄三年十二月廿四日病死あれば、其子式部大輔義久其家を継といへども、年少く武勇に長ぜざれば、毛利元就の為に追せばめられ、播州上月の城に蟄してありけるが、山中鹿之助を得て其勢竜の雲を得たるが如く、追々他国を切随へ、旧城雲州富田を造営して、八重姫、勝丸諸とも移り玉へば、山中鹿之助は上月の城代となりて播州にとゞまりける。

作者は、鹿之助の忠義というものを、軍記に見えるような衰運の中襲いかかる苦難に抗し続ける生き方から、尼子を立てることで己の志を実現しようとする生き方へと捉え直した。

かくて鹿之助は、我が志ほぼ成就したりとの思いを抱いたとする。

鹿之助　倩往事を思ふに、「我幼少より父母の恩山よりも高く海よりも深し。天下に英名をなさずんば再び父母に音信せまじと誓て国を出たるもはや一昔しに成たり。今尼子に随ひ衰へたる家を興し再び雲州富田の城主になしたるは皆我方寸より出たれば、我に於て事足りといゝつべし。……」

そしてこの思いを、先に召し抱えた大谷古猪之助に使いを命じて、信州の父母へ伝えるが、父森之助は、かねてから我々夫婦は仙術を以て

鹿之助の日々の行動を見ていたと言い、「幼少の頃天下に英名をなさずんば再び父母にまみへじと大言を吐出たるに」、これは慢心であると断じ、この慢心に乗じて悪鬼が鹿之助に分け入り災禍をなすと予言する。

その災禍とは、一族の尼子九郎左衛門が毛利と通じて企てた陰謀のことであった。九郎左衛門は、毛利から送り込まれた琵琶法師を使って、上月を守っていた鹿之助らに毒酒を飲ませ、一方で義久を縛して藝州へ移し、富田城を乗っ取る。鹿之助は餓鬼のごとき姿となり、これを九重姫が懸命に看病し終に有馬の湯によって本復するとあるが、これは小栗判官説話に依拠する。鹿之助は本復して、

有し事どもを聞給ひて、姫の貞心を感じ、古猪之助が信州のやうす、森之助の詞を聞、慢心を大に後悔ありける。

とする。このように要所において、鹿之助の天下に英名をなさんとする志（あるいはその逆としての慢心）ということが確認されつつ筋が進むのである。

このあと結末に至るまでは、勝丸（後の勝久）を守って富田城の奪回を目指す鹿之助の行動が描かれる。彼はここで足利将軍家による後ろ楯を得ようとの策に出る。そしてまず、「当時将軍家に佞り時を得たるは松永弾正なり。彼は大悪不道にして謀叛の志あり。かゝる者に取り入事、一つの謀なり」と考え、松永の草履取りとなる。後に将軍臨席の場で武勇を発揮して称せられ、将軍直参の草履取りになる。一方、尼子勝丸を庇護していた東福寺の兆殿司は、勝丸の姿を描いて将軍の妹白綾姫に贈る。姫はこれを見てその像の主に執心し、終に縁組みに至り、従五位上尼子四郎勝久と称する。勝久が将軍と対面した折、そこに控える草履取りが鹿之助であることに気付き、事情が明かされる。鹿之助は富田城奪回の本意を語り、将軍はこれに加勢する。松永による援軍も加わり、勝久は終に九郎左衛門を討つ。

勝久悦び給ひ、「汝（九郎左衛門）が悪計にて忠臣の輩に千辛万苦をさせ、剰父義久君をも擒となす事、天罰思ひしれ」と首打落し給へば、諸軍勢凱歌を三度揚て富田の城へ入給ふに、城下の民鼓腹してよろこび、雲州大に治りける。

ここで、九郎左衛門の滅亡は即ち人民の救済、世の安寧とされている。さらに将軍家御母慶寿院から、姻戚たる尼子義久を解放するよう毛利家に要請したため、「元就も止事を得ず、勝久と和睦し義久を雲州富田へ送かへし」たとする。

この後鹿之助は勝久と共に、将軍同席の場で、松永弾正に対して礼謝した。

「ひとへに松永の加勢ゆへに大功を顕し候事、老君の大恩なり」と、ことばを巧に礼謝すれば、慢心の弾正よろこぶ事はなはだ鋪、なをも元就和睦を松永よりもたのみつかはしけるとなり。

松永の性格をも知った上で、尼子の安定のためにこれを活用したのである。

またそれぞれ活動していた大谷古猪之助、横道兵庫之助、寺元生死之助ら尼子十勇士もここに集結する。かくて尼子の繁栄を暗示する次の文で本作は結ばれる。

是より尼子の威勢旭の登るがごとく、十勇の猛将補佐しければ、近国の大名小名、将軍の聟たるをおそれ、鹿之助が智勇兼備せしを賞し、鉾を伏て尼子にしたがひければ、やがて元の十一州を切したがへ給はん事掌の中にありと、いさみすゝんではるを迎けるこそめでたけれ。

終末部の鹿之助は恰も策士のごとき立ち回りをする。彼の志は、敵を滅ぼし切り取ることにではなく、尼子を立てて世の安寧を実現することにあったのである。かくして巻頭に提示されていた「天下」に立ち返る。本作は、鹿之助を尼子家に対する節義一徹から解放し、己の志の実現を求めて生きる人として捉え直した。彼の生き方は父森之助のそれと対照をなしつつも連関し、共に世の安寧への希求という枠組へと収斂する。そしてこのような構造が、読本独自の様式であったと思われる点について、以下考察しておきたい。

二　『絵本更科草紙』と後続作

『絵本更科草紙』は、幕末さらには明治期に至るまで多くの後続作を生み出した。合巻『十勇士尼子柱礎』初編の嘉永四年（一八五一）柳下亭種員自序に言う。

曾て文化の頃、遠江国小夜中山の辺に住る栗杖亭鬼卵、更科草紙と題号して十士が伝奇三編を著す。今世舌耕師の彼更科の月にはあらで是に詞の花を増補夜講に読しを、錦昇堂のきゝえて梓に彫ん事を乞。

『絵本更科草紙』に描かれた森之助と更科、鹿之助、尼子十勇士をめぐる話は、舌耕にも取られながら合巻や切附本などにも著され、明治期の講談本へと続いていく。ただしそこでは、前述したような全編を統括する枠組までが踏襲されたのではなかった。

『尼子十勇志』なる切附本がある。高木元「切附本書目年表」[5]に、梅林舎南鶯作、歌川国綱画、安政五年（一八五八）刊として掲げられる。『絵本更科草紙』の筋を要約して挿絵を入れた読み物と認められ、終盤の十勇士の行動について合致しない部分もあるが、そこに至るまでの森之助、更科、鹿之助をめぐる話はほぼ忠実に踏襲している。ただし文章を刈り込む中で変質が生じているところがある。

再び『絵本更科草紙』における相木森之助の話について見る。森之助は、「威有て武からず、終に怒りをあらはせし事なし」、「其頃村上の家中に誰いふとなく、相木森之助は万夫不当の勇士なりと沙汰ありけれども、誰あつて其振舞を見し人もあらねども……」と、武勇を完全に内に封じ込めていたが、これには理由があったとされる。それは叔父の相木市良兵衛が主君村上義清との不和から甲州武田家へ移ってしまったことであった。井上光興が森之助を重用するよう主君義清に推挙すると言い出した時、彼は涙を流して次のように辞退した。

「我幼きより父母にはなれ叔父市良兵衛に養育せられ何ひとつ学ぶ事もなく、剰叔父なるものは不忠を懐き甲州へ逃去候へども、我は世々君恩を辱せし身なれば独とゞまり罷在候といへども、叔父の悪行に恥入、漫に他出さへいたさぬ心底に候。殊に我を用ひ給ふときは、信甲の合戦に叔父敵方にあれば、もし裏切やせんなどゝ諸卒のうたがひなきにしもあらず。我は此まゝ捨おき給ひて、君の一大事のとき一命を奉りて人口を塞ぐの外念願さらにこれなく候。」

親代わりであった叔父の出奔は彼を、自分が動くと村上家中に、あるいは村上・武田の間に波風を立てるという思念へと追い込んでいったのである。他人との衝突を避けて安穏でありたいという心情は、彼の置かれた状況から必然的にもたらされたものとして書かれている。そしてこの心情が「天下」という観点と結ばれたとき、前節に見た〝非戦の思想〟となる。彼が馬場美濃守に扮して諏訪が原を治めた様は次

のようであったとする。

近隣の百姓共馬場美濃守此城を守り給ふと聞て、水の低にしたがふごとく来りければ、森之助も民を撫育する事我子のごとくなれば、刀に血を濡さずして駿遠の輩森之助にしたがひ、福有心の儘にして安楽にくらしける。

前述の通り、世の安寧は、このあとの鹿之助の伝をも含む全編を統括する枠組であったと解する。そうであれば本作は、人物の置かれた状況と抱く心情とを必然のものとして繋ぎつつ単に話を並べているのみではなく、これらが最終的に全編の枠組に包摂されるべく構想されていたと見られるのである。

この観点から前掲『尼子十勇志』を見てみる。森之助の叔父の出奔のことは、

相木一郎兵衛といふものあり。主を怨る事ありて国を去り、村上と不和なる甲州の武田信玄に降参したり。

と一度触れられるのみである。このことが森之助の内面に影響を与えたことを記す部分は採られていない。森之助が牧島大九郎による辱めに抵抗しなかったこと、喧嘩を見て怯えたことは書くが、かかる臆病と見える振る舞いの背後にあった彼の思いについては言及がない。諏訪が原の城を治めたことについても、

遠州諏訪が原の城におもむき、美の丶守と名のり、民を撫育し安らくに世をわたりぬ。

と説明のみの書き方であり、ここからは森之助の非戦の思想や天下という観点が浮かび上がることはない。

鹿之助に関する部分についても同様である。『絵本更科草紙』では前節に掲げたごとく、鹿之助は両親から自立する時、天下という観点から己の志を表明した。

「今天下大に乱れ、英雄星のごとくに起り、いつ昇平の代となりなんも計りがたし。いやしくも我幼年より井上道人にしたがひ、軍学の奥義を学び剣術の琢磨せしも、天下に英名を顕はさん為なり。……某は天下に横行して世を納め民のくるしみを救はん事を願外なし。我一人此城に留り、寄来らん敵に淡吹せ、其上何国へも立退、名将を尋らんで随身せんより外の願ひは是なし。」

これが『尼子十勇志』では次のように縮約される。

「われは此城にとゞまり、敵兵寄なばめざましきはたらきして目をおどろかし、後城を出て諸国を廻らん。」

『尼子十勇志』は人物の行動を端的に記述して次々に生起する事件を要領よく伝えていくことを旨とする。これと対比するとき、『絵本更科草紙』の読本としての特徴が明確に把握できるもののようである。

以下同じ観点から明治期に刊行された後続作について考察しておく。これらの多くは「尼子十勇士」あるいはこれに類似の書名を有し、大まか次のように分類できる。

(1)『絵本更科草紙』の本文を活字化したもの。ただし細かな文字遣いや語句の変更がある。また文章を新たに区切って章段を設けたり、反対に接合するなどの加工を施している。挿絵は新たに作り直している。(例)『尼子十勇士伝』(和田篤太郎編、春陽堂、明治十六年(一八八三)刊)、『尼子十勇士伝』(四教書院、明治十九年(一八八六)刊)など

(2)『絵本更科草紙』の中から幾つかの場面を選んで見開きの画図を作り、そこに簡略な文章を書き入れたもの。(例)『尼子十勇士実伝』(大西庄之助編、松延堂、明治十八年(一八八五)刊)、

『尼子十勇伝』（今井七太郎編刊、明治二十一年（一八八八）刊）など

(3)『絵本更科草紙』に拠りつつ文章自体は作り直しているもの。全体の筋をほぼそのまま踏襲するものと、改変を加えたものとがある。（例）『尼子十勇士』（日吉堂、明治三十四年（一九〇一）刊）、『武士道精華山中鹿之助』（雪花山人著、立川文庫、明治四十四年（一九一一）刊）など

いま検討すべきは(3)である。明治三十四年刊の『尼子十勇士』は、揚名舎伯林口演とある講談速記本である。ここでは相木森之助は、村上が武田との戦に敗れた時に甲州方に捕らえられたとし、その後諏訪が原の城を預かったのも、馬場美濃守の依頼によってであったとする。従って『絵本更科草紙』にあるごとき彼の考え方生き方の問題は扱われることがない。鹿之助が両親のもとを離れるのも、武者修行のためであったとされ、天下に英名を揚げんとの志の表明のことはない。立川文庫の『武士道精華山中鹿之助』では森之助を、「家中においては第一の美男、気質も到つて温和しく少しも人と争そいを好まず、喧嘩を仕掛けられても、更らに取り合はない。左様かといつて決して卑怯未練の振舞もなく、何処か人に変つたところがあつて所謂沈勇とでも申しませうか、若武士には珍らしい人物」と、あくまでも彼は武勇の人でありただそれを控えていたとする捉え方に変わっている。諏訪が原で仁政を施したことは書かれるが、そこに至るまでの彼の争いを厭う生き方のことが描かれていないため、単発の話として終わっている。鹿之助が両親に向かって、世を助け人民を救いたいと述べることは書かれている。ただし山名氏資を捕らえる話では、短刀を突きつけてその場で「降参の旨を答へ」させ、「矢張り引つ抱へたる儘で」連れ帰り、「尼子義久の幕下となることを誓」わせる。相手を力で威圧するのみのやり方は、『絵本更科草紙』にあった尼子を通じての徳化とは異なる。以上のように対比してみると、世の安寧ということを提示しながら全編を括っていくという方法は『絵本更科草紙』特有のものであったことが窺い知れる。

三　『出雲物語』

『出雲物語』は、紀美麻呂原編、東籬亭主人補正、五巻から成る。内題「出雲物語」、見返し題「中国外伝出雲物語」。文政十三年（一八三〇）、京都・山城屋佐兵衛ほか刊。末尾に続編を予告するが、刊行を確認できず、未完に終わったと見られる。

巻頭に置く「出雲物語述意」に次のように言う。

此書専ら尼子経久が事を記して、長禄より始り応仁を中とし文明に終る。然といへども其時代の治乱一貫せざるも多かるべく、また経久が伝諸説ありて一ならず。陰徳太平記の伝実に近かるべし。然に此書家伝を一説によせたるなど、元より実録にあらずして、事を好む稗史なるが故なり。

本作は尼子経久の事跡とその時代を描こうと意図したものであった（ただし刊行された初編五巻は経久の幼少時代のところで終わっている）。また『陰徳太平記』が、虚の部分が混在するものの、最も拠るべき書であると見ていることが窺えるが、一方で言う。

此書の名を伊豆裳物語といふは、出雲の事を専書たる故にはあらで、物語出雲に出て出雲に終るが故なり。

即ち『陰徳太平記』をはじめとする軍記に見えるような出雲での戦の

一々を描くものではない。尼子氏興衰のことは全編の構成を大きく支えるものとして基底に置かれているのであり、その中を満たしているのは、後掲するような尼子家臣とその類縁の人々による艱難辛苦の話である。

巻一冒頭部分は、『陰徳太平記』を下敷きにしながら改変を加えて作られている。まず『陰徳太平記』巻二「尼子経久立身之事」を掲げる。ここでは、①経久が中国十一州の太守と言われるまでの勢力を得ることとなったその由来を説くと前置きをし、②経久の父清定に至るまでの出雲国支配の歴史を略述し、③経久が出雲の守護代になってから江州佐々木家の下知に背く恣意的な振る舞いがあったとして追放され、代わって塩冶掃部助がこれに任ぜられたことを言う。

①尼子伊予守経久、初ハ雲州富田七百貫ヲ領シテ一国ノ守護職タリシガ、天文ノ比十一州ノ太守ニ成登ラレシ由来ヲ探リ見ルニ、【②昔時出雲州ハ、塩冶判官高貞将軍尊氏公ヨリ賜リテ領シタリシニ、高貞、高師直ガ讒ニ依テ自害セシ後ハ、佐々木道誉賜リテ、吾身ハ江州ニ在ナガラ、雲州ヘハ一族ノ中一人差下シテ成敗ヲ掌シメケルガ、一旦ハ山名ガ為ニ押領セラレタリケレ共、明徳ニ山名陸奥守、同播磨守亡シカバ、又道誉ガ孫大膳太夫高詮旧地ヲ取返シテ、彼所ヘハ経久ノ祖父上野介持久ヲ下シテ守護セシム。持久ノ子息清定相続デ国務ヲ司ドリ、租税ヲ江州ヘ運漕セラレケルニ、】

③経久マダ又四郎ト云シ時、江州ノ下知ヲ不レ用富田近郷ヲ押領シ、当国ノ士三沢、三刀屋已下ノ者共ヲ攻随ヘントセラレシカバ、六角貞頼大ニ怒テ、頓テ三沢、三刀屋、浅山、広田、桜井、塩冶、古志ナド云国士ニ下知シテ、経久ヲバ追出シ、塩冶掃部助ヲ以テ当国ノ代官トゾ被レ定ケル。

これに続く部分には、こうして本拠富田城を失った経久が無念の中で流浪したこと、そして終に奇策を用いて塩冶を急襲し城を奪回したことが書かれる（『雨月物語』「菊花の約」の挿絵に取られて有名な、文明十八年（一四八六）元旦の富田城奪取事件）。

一方『出雲物語』巻一冒頭は以下のようになっている。まず①'人の世の無常をわきまえず驕り貪る者の多い中で、尼子経久はこれと異なり人格勝れるがゆえに繁栄と名声を得た、その来由を説くとして、②前引『陰徳太平記』の【②】をほぼそのまま入れ込んでいる。ただしここで経久の父を清久とし、割書して、『陰徳太平記』に出る清貞のことであるとする（正確には『陰徳太平記』では前掲のごとく清定）。そして、③'この清久に狐疑の性質があったために出雲の国士たちの心が離反し、中にも塩谷掃部助は、清久の時を得顔なるを憎み対立に至ったとする。

①'奢れるもの長久からず、春夜の夢のごとし。猛きもの終に滅亡ぶ、風前の塵に同じ。世中の定めなきは、風になびく浮雲のごとく、人の身の定めなきは、飛鳥川の淵に似たり。尊きとて洩るゝはなく、卑きとてまた逃る事を得んや。雖然人情の浅墓なる、富で礼を知らざる者は色を歓び声を称て鄙にたはるゝ狐の如く、快楽を淫酒の穢たるに耽らし、驕者の山の高きを知らず。貧うして貪るものは隣の宝を算へ、灯火による夏虫に等しく、心意を不及の念につからし、五慾の海のふかきをしらず。斯る輩倭漢に多かるべき中にも、人皇百余代後柏原後奈良両朝の御宇にあたつて、尼子伊与守経久といふ人のみ、富て驕らず、貧して嗇の心なく、美名は孝義に馥しく、武勇は智謀に高し。山陰九州を討従

がゆれども、その富更に不義ならず、其威かつて悪ならず。繁昌子孫におよぼし雷名千載に轟かす、其来由を尋見るに、

【②原出雲国は、塩谷判官高貞足利尊氏卿よりたまはつて領したりしに、高貞、高武蔵守師直が讒言にかゝりて自害せしより以来、佐々木佐渡入道道誉申給はつて、吾身は江州に有ながら、一族の内をゑらみて差下し成敗を掌しむ。その、ち暫く山名に押領せられしかど、明徳の乱に山名陸奥守氏清、同播磨守満幸亡びしかば、道誉の孫大膳大夫高詮、またも旧地をとりかへして、経久の祖父佐々木上野介（陰徳太平記には尼子とす。太平記には富田判官秀貞とす）持久を下して主護せしむ。持久の子息刑部少輔清久（陰徳作清貞）相続て国務を司どり、租税を江州へ運送せしが、】

③'此清久こゝろ逞ましき勇将にて、智もまた伶俐かりけるが、惜むらくは狐疑ふかく、讒を信ずる曲あつて、賞は軽く罰重く、小過に大功おもひかへて、自然法礼あきらかならぬ事多かりければ、三沢、三刀屋なんどよばるゝ国士ども、恨みを含もの多かりける。中にも塩谷掃部助則貞といへるは、往昔の領主判官高貞の子孫にして、清久とは親しき一族同士ながら、其姓奸曲にして、清久が時を得臾なるをふかく憎み、「栄枯は時によるとはいへど、吾遠祖は此国の主将たり。理をもていはゞ、吾こそ主護職は勤べけれ。新家の清久にいかんぞ手を束ね媚を呈して寵を求る事のあるべき」と、折々は口にも出してつぶやきけるを、人有て清久に告たりければ、清久もまた大に怒りて、遠からずおもひしらせんものと、骨肉の交忽ち敗れて呉越の思ひに日を送りぬ。このあとは③'を承けて、清久が塩谷掃部助によって富田城を奪われて滅亡する話へと続く。

作者による改変は二点ある。一は、『陰徳太平記』では、富田城を失ったのは経久であったとするのを、本作では清久であったとする点である。二は、清久・経久父子に即して人格という観点を提示したことである。即ち『陰徳太平記』の叙述が、①②③と直線的に流れるのに対して、本作では、巻頭まず経久の人格の卓越を謳い上げ、【②】を挟んで、清久の狐疑の性質のことを示す。未完に終わったが、本来の構想としては、清久で崩壊した尼子家を経久が立て直すというものであったと推定できる（これで「出雲に出て出雲に終る」物語になる）。そこには、清久において発した物語が経久において収束するという構造があり、それを支えるのが父子各々の人格という観点である。

さてこのような全体を統括する枠組の中に置かれる、尼子一族とその類縁の人々をめぐる話は、いかにして作られているのであろうか。塩谷は清久を放逐しようと企み、近江の六角高頼に接近し、自家に伝わる切竹の剣を献上しようとするが、これを道中の旅宿で奪われる。それは尼子の忠臣山中三郎兵衛の息子で、不行跡によって勘当されていた三吉の仕業であった。塩谷は三吉の残した片袖に山中の定紋があるのを見て、これは清久が山中に命じてさせたことである、そもそも清久には自立の志があるなどと讒言し、六角から清久追討の命を得て富田城を攻撃する。

清久は、妻室花の方、幼い継嗣吉稚（後の経久）を残して自尽する。臣下の山中三郎兵衛、亀井七郎、小雄（花の方の侍女）らが花の方と吉稚を庇護しつつ艱難の旅を続ける。一行は備前国蜂浜まで逃れ、ここで小雄の母音羽と合流する。音羽は、尼子家の足軽箕田源作の妻で、源作が病没した後息子の六蔵が無頼を重ねた上に御用金を

奪って出奔、その科により娘小雄とともに国を追われてこの蜂浜に移った。小雄はその後花の方の侍女に取り立てられて出雲に戻ったが、今回の難によって主君を伴い母を頼ってここへ来たのであった。かくて一同は塩谷の差し向ける討手から懸命に逃れながら旅を続けるが、備前・播磨の国境で盗賊に襲われ、互いに離れ離れになる。音羽は小雄と共に吉稚を伴って逃れ力尽きたところを、今は出雲の軍太と名乗っている、前出の無頼の息子六蔵に助けられる。六蔵は今までの過ちを母に詫びてみせるが、後に悪心を顕わにし妹小雄を欺いて遊廓に売る。このように善良なる人々が身内の悪に苦しめられるという形を、作者は意識的に用いている。前掲の山中三郎兵衛の息子三吉についても、刀剣盗みの発覚と父の苦悩などのことが後編において書かれるはずであった。

花の方は旅の途中で一行から離れて都へ上り、大原寂光院で出家する。当初夫清久の狐疑の性質ゆえに三沢・三刀屋らの国士の心が離れたが、塩谷が清久を攻めた時、この三沢・三刀屋らと共に、彼女の父馬木上野介も加わった。彼女は、吉稚は成長して塩谷を討ったとしても、自分が側にいる限り祖父馬木を討つことはできない、自分が勧めて討たせれば孝に背く、とどめれば節に背く、「正なき父とひとつならぬ心を顕はし申さんため」吉稚から離れることを決意し仏道に入ったのであった。

作者は明らかに『陰徳太平記』を見ておりながら、話は清久（清定）・経久の二代のみに限られているため、続く政久、晴久、義久、勝久の部分は顧みていないかのように見えるがそうではない。一行が出雲を出て備前蜂浜へ辿り着き音羽に対面した時、山中三郎兵衛が花の方の悲愁について次のように語る。

……忍々に落しまゐらす心は、むかし平家の一門帝都をおちし哀しみに、益るとも寧も劣はせじ。錦の浜は過給へど、いつ故郷に着給ふべき。羨しくも立かへる浪さへ超か袖師の浦、うらみは尽ぬ旅の道、踏馴給はぬ長路には、荊棘をまたずして御足は紅に染み、住なれたまはぬ板屋の舎に、時雨よりまづ御袖をぬらす。錦の浜は中海、袖師の浦は宍道湖の水際のことであり、富田の城から備前へ向かうのに、特に袖師を通ることはあり得ず、記述としては確かにおかしい。このことが起こったのは、これが『陰徳太平記』から引き来たったものであったからである。『陰徳太平記』巻四十「義久兄弟藝州下向之事」に、尼子義久が七年に及ぶ籠城の末毛利に降伏し、囚われの身となり、富田から安藝国長田へ（西へ）と引かれていく様が、次のように書かれている。

蘇武ガ胡国ニ捕レシ恨ミ、平家帝都ヲ落シ悲ミモ、今身上ニ在テ、先立モノハ涙也。錦ノ浜ヲ過給ニモ、浜ノ名ニオフ錦ヲバイツカ故郷ニ著ルベキト、羨シクモ立帰ル浪サヘ越カ袖師ノ浦、恨ハ竭ヌ旅行ノ道、急グトシモハナケレ共、同八日ノ夕ツ方杵築ニゾ著給フ。此地ニ於テ北ノ方ヲモ引分可レ申由、警固ノ武士共ノ申ケレバ、……

こうして杵築即ち大社で義久夫妻は引き裂かれる。北の方はこのあと阿佐の観音寺なる比丘尼寺に入って剃髪し、祖先の霊に香華を手向け夫の安穏を祈った。

文治ノ古、建礼門院ノ大原ノ奥ナル寂光院ニ浮世ヲ厭ハセ給ケン御嘆キモ、吾身ニゾ斉シカルベキト思続ケ給ニモ、竭セヌ物ハ涙也。

義久の北の方が我が境涯を建礼門院と重ねたとするこの部分は、『出

雲物語』において、花の方が大原寂光院に入って剃髪したとする話に示唆を与えた可能性がある。

『陰徳太平記』ではこの富田城陥落の後、山中鹿介らの遺臣が尼子勝久を擁して家の再興を目指して各地を転戦する様が描かれる。

先年尼子義久、毛利元就ノ為ニ降旛ヲ樹ラレシ時、山中鹿助ヲ始諸士悉ク国中ヲ追出サレ、漂流牢落ノ身ト成シカバ、皆京師ニ上テ親ミヲ尋ネ縁ヲ求メテ、尺蠖ノ屈ニ身心ヲ苦メ、一度ハ雄飛ノ時ヲ迎ヘントス。（巻四十三「尼子勝久入二雲州一付松永霜臺事」）

『陰徳太平記』に記される尼子氏代々の話には、家の滅亡に直面して、身を屈めながら再興を念じて苦難に耐え抜く人々の生き様が底流する。『出雲物語』の作者はこの要素を酌み取って、遺臣たちが吉稚を守って襲いかかる艱難を乗り越えていく話を構想したものと考えられる。

また『陰徳太平記』に見える、家の滅亡によって孤独の境涯となった義久北の方の生き様は、『出雲物語』の花の方へと取り入れられたと思われるが、ここで彼女の出家を決定付けたのは父親馬木上野介の行動であったとする点は創意である。馬木が清久を攻めたのは、清久の性質に由来する。かくして花の方という人物の生き様は全体の枠組と結ばれるように作られているものと解する。

四　『尼子九牛七国士伝』

『尼子九牛七国士伝』は為永春水・松亭金水合作。初輯五巻が天保四年（一八三三）、江戸・丁子屋平兵衛ほかにより刊行される。巻末に二輯の予告を掲げるが未刊に終わったと見られる。まず冒頭に、衰退した尼子家の再興ということが提示される。

こゝに出雲国富田の領主尼子家の来歴を索ぬるに、佐々木源三義秀の苗裔なり。往昔は武名輝しも、栄枯得喪盛衰の移り変れる世間なれば、一所懸命の地を領し数代潜て在しけるが、此家忽地再興して威を震ふべき時や来にけん、国家将に興らんとする時は必らず禎祥ありといへり。

右の義秀から九代に当たる佐々木大膳大夫経秀が花見に出た時のこと、家臣たちと離れて一人渓谷に分け入り、松が枝に掛けられた羽衣を見付ける。経秀はこれを懐に隠し、清流に浴する天女を伴い帰って妻とする。二人の間に生まれた孝若（後の経久）が五歳になった時、経秀が初めて事実を明かし羽衣を見せると、彼女はこれを手に取るや忽ち別れを告げて天へ飛び立つ。経久の代になって、天女の子なるがゆえに佐々木を天子と改め、後に帝を憚って尼の字に改めたという。

この話自体は、『西国太平記』（橘生斎著、延宝六年（一六七八）刊）巻二「尼子晴久攻二毛利一幷尼子由来事」にある。またこれの異本かと見られる『西国七将軍記』（京都大学附属図書館、大惣旧蔵本。写本一冊）巻一「雲州天子ノ由来事」にも収められる。ただし何れも尼子という名の「由来」を述べるものであり、このことについてはこの条のみで説き終わり、後の話には関与しない。『西国太平記』で、去っていく天女が夫経秀に残す言葉は、

今生ノ対面ハ是マデ也。此子ヲ能育テ給へ。吾是ヲ守ラン。

とあるのみで、残して行く我が子の行く末を守ろうというものである（『西国七将軍記』でもほぼ同様）。一方『尼子九牛七国士伝』では次のように、自分は家の守護になると言い、併せて家の将来についての予言を

もしている。

はや今世の対面も今日を限りと思されよ。これまで厚き情のほど、且は吾子の恩愛はいと絶がたく侍れども、今日此衣わが手にいるは、はや天上へ帰るべき時の至りしものなれば、片時も此土に止まり難し。さはれかばかり鵠恩ある君が家をば守護なすべし。然りといへど孝若はその運微にして早世なれば、名を顕はすに至るべからず。其子にいたりて勇名を四海の内に輝かす壮夫の産るべし。且は此家の旧臣たる牛尾公朝は直実なり。渠が子孫に英雄ありて、此家を再興する事あらん。其外告たき事もあれど、天機を漏すの恐れあれば、まづ是のみにて止ぬべし。

作者は、軍記の中に一記事としてあった事柄をもとに、作品全体を統括する枠組を作ろうとした。かくて、未完に終わった部分も含めて全編としては、この予言に沿って、名将現れそれを忠臣牛尾の子孫が支え、終に佐々木の名門でありながら衰退した尼子家の再興が成就する話として構想されていたものと推定できる。尼子家の定められた宿命のごとき、人為を超越した力を提示するという方法は、前掲した『絵本更科草紙』と対照をなす。

後に牛尾朝忠（公朝の子）が、千寿丸（後の義久）と我が子五郎（後の忠親）の秀逸を称して言う。

父の説話に、経久公の母なる天女が久方の雲井に帰れるおりからに、必ず子孫に名将いでゝ威を海内に震んといひ遺したりと聞たるが、正しく今の幼主ならん。すゑ恃母しきおん景勢。また吾家にも英雄の生るゝ事のあるべしと言おきたりと聞たるが、嫡子五郎がたち挙動、吾子ながらも凡人ならじと折々驚嘆する事あり。

細川政元が将軍家に抗するため中四国の軍を備前に集めた時、義久も不本意ながらこれに応じた。政元は白牛九頭を屠って血を啜り諸将に盟約をさせようとするが、義久はこれが理に当たらないことを説き、終に撤回させた。

九疋の牛は勇み悦び、頭をうなだれ義久を数回見て逃さりぬ。

また牛尾公朝の弟は出家して行然と名乗り、尼子家ゆかりの武士を求めて諸国行脚に出、佐々木一族の牛飼舎人の後裔にあたる武勇の少年甚三を見出す。また伯耆国大山の麓牛村出身の牛村雅之助は、行然の導きによって、今は才兵衛と名のり大坂堀江に住む尼子家忠臣の息牛川浪次郎秀武と義を結ぶ。

これぞ上古天女の告、また義久が九牛を助命し仁徳善報ありて、牛にかたどる名氏の強勇、自然に尼子を追慕して文武の英才随身し、九牛士ぞと後の世まで美名を口碑に伝へらるゝは、容易からざる俊潔なり。

本作には『南総里見八犬伝』の影響が顕然としている。この行然は、大、九牛の因果は八房の因果である。確かに単に『八犬伝』の形を流用し当て嵌めたに過ぎない作であるかのように見える。しかし再興の主を義久とし、九牛の家臣団の先導者を牛尾氏としたところには若干の意図が認められると考える。

史実において、尼子義久は毛利に富田城を明け渡して降伏した人物である。また牛尾氏に関しては、その重鎮牛尾遠江守幸清がこの時終に力尽きて毛利に降っている。ただしこの幸清は、経久による領国形成期から尼子を支え、以来牛尾氏は家臣団の中心であり続けた。ここに、八犬伝型との連結を可能と作者に考えさせるものがあったと推定する。『陰徳太平記』などには、結果としては敗北に終わるものの、義久のもと尼子家の衰運に抗いながら己の全てを投入する人々の生き

方が描かれている。作者はそこに、この人々が、自分は生まれながら主家と結ばれており、そしてその再興成就は宿命によって約束されていると観じているとする読み込みをあえて行った上で読本化した。かくして、当初それぞれの人生を歩んできた者たちが宿縁を知って同じ志のもとに集結するという、『八犬伝』由来の型を、尼子家君臣の生き様に繋ぎ合わせようと試みたところに本作の創意があったと解する。

結語

読本作者たちは、軍記類を通じて尼子氏の史伝に触れたとき、そこに凋落衰亡する者の悲哀のみを見たのではなかった。再興を信じて懸命に生き抜こうとする人々の在りように、忠義のために屈しない精神や、己の志の実現への希求、一族同類の命運への思いなどを、想像を伴いながら見出した。そしてそれらを、読本というジャンル独自の様式の中へと取り込んでいったものと考えられる。

注

（1）史上の人物としては鹿介と記し、作中人物としては本文の表記に倣って鹿之助と記す。

（2）濱田啓介「家臣捃拾譚―水滸伝受容作品に結合する日本的要素について」（『近世文学・伝達と様式に関する私見』（二〇一〇年）所収）

（3）田中則雄「人為と人情の世界―後期上方読本における長編構成の方法―」（『説話論集　第十集』（二〇〇一年）所収）

（4）なお藤沢毅「『絵本更科草紙』論（一）―前編の歪み―」「同（二）―勝頼の遺児―」（『文教国文学』第四六・四八号、二〇〇二・二〇〇三年）には、当初は勇婦更科の物語として構想されていたが、制作の段階で後編・三編へと続く長編への転換がなされ、鹿之助の物語への接続が図られたとの見解が示される。本稿では、この前提に立っても、最終的に全編を統括する構造が考慮されたと認める。

（5）『江戸読本の研究』（一九九五年）所収。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」（二〇一〇～一二年度、代表・要木純一）、科学研究費補助金・基盤研究（C）「文政期読本の基礎的研究」（二〇一二～一五年度、代表・田中則雄）の研究成果の一部である。

The historical biography of the Amago family in *yomihon*

TANAKA Norio
(Shimane University)

〔Abstract〕

The historical biography of the Amago family which was written in *gunki*(tales of war), such as *Intokutaiheiki*, was adopted as a material for *yomihon* in the latter period of Edo. Then it was fictionalized according to the respective forms of *yomihon*.

Key words : *yomihon*, novels in Edo period